

WEP

ウェブ俳句通信

VOL. 79

俳句通信

特別作品25句 ● 田中水桜「まほろば」

特集 ● 現代作家を読むXII

斎藤夏風論—若田由美 青柳志解樹論—中村姫路 鍵和田柚子論—春田千歳

【鑑賞会】

柳生正名第一句集『風媒』を読む

参加者／中村和弘・中西夕紀・柳生正名

【特別作品80句】

船越淑子「女四書」

【特別寄稿30句】

松岡隆子「薄氷」

【実力作家競詠20句】

茂田慶花「春よ来い」

大塚阿澄「ほうれん草」

● 作品 ●

星野 榛・黛 執・倉田絃文・正木ゆう子・山口昭男・小原啄葉・
森田公司・檜 紀代・米山光郎・小林篤子・松本ヤチヨ・
山田六甲・杉 良介・柴田多鶴子・間島あきらほか

● 好評エッセイ ●

先人に学ぶ俳句「川端茅舎(2)」岸本尚毅
俳句とともに「飯田龍太の風景

——龍太の水」井上康明

新連載・虚子散文の世界へ

「初期諸作、どうやって飯を食うか」

本井 英

虚子の肖像「虹の虚子」坊城俊樹

地味で変な虚子句

五句集を読む「渡仏航」阪西敦子

森澄雄の背なか「北ボルネオ死の行軍」

千田佳代

椒部を求めて

「子規との交響」神田ひろみ ほか



季節の中で[®]

神奈川県横浜市



初蝶の藍の波間を抜けし白



古賀雪江

海を眺めていると、湾に正午の汽笛が響き渡る。汽笛を聞くといつも何故か胸がキュンとする。横浜に移り住んで四十年になるが、大型船が次々に入港の春、夏の夜の湾を滑る遊船の赤い灯、海岸通りの銀杏並木の黄落、春節祭の中華街の賑い、横浜は今だに私にとっては旅人気分であって、詩囊を膨らませてくれる街でもある。ペリー米航の間の残る老舗ホテルニューグランドは、雪解の節目節目の大会で馴染んでいるホテルであって、吟行の途に毎々立ち寄る憩の場でもある。

書齋にて

山崎房子

三寒の鳥 四温の雀たち



明月院の名月坂を上り切った住宅地に家を建てて44年経つ。大船駅からバスで20分。「不便な所ネ。この20分が余計ネ」と訪れる友だちは口々に言う。商店街の店はつきつき閉じてしまい、買い物にも不便だ。大きな買い物袋を持って大船に出る。冬がまた寒い。雪が積もるとバスが上がってこられないし、「陸の孤島」である。先日の春の2回の大雪には難儀した。

ここに住むうれしさは、建長寺東山で鳴くほととぎす、家を吹き抜ける涼風だろうか。



特別作品25句

まほろば

田中水桜

凜として艶なり歌留多宙を飛ぶ

祝句

まほろばと同じ真秀の名冬うららか

三王岩は海の牙なり初日出づ

双六の峠の茶屋に一と休み

羽子日和弟と突き母と突く

福達磨買うて双手にもてあます

特集

現代作家を読む XII

「写生」を己れの作品行為の根底に据え、

自然と向き合う時間の中で、作品に深みと滋味をもたらしてきた俳人。

今回はそんな俳人について、それぞれ気鋭の筆者に書いていただきました。

斎藤夏風論 岩田由美

青柳志解樹論 中村姫路

鍵和田柚子論 春田千歳

前列右から 遠藤氏、小川氏、長嶺氏
後列右から 星野氏、安田氏、藤本氏



ゲスト 遠藤由樹子・小川美知子

長嶺千晶・安田青葉

ホスト 星野高士・藤本美和子

編集長 超結社句会の第24回目です。ゲストは「未来図」同人の遠藤由樹子さん、「朝」同人の小川美知子さん、「晶」代表の長嶺千晶さん、「対岸」同人の安田青葉さん。ホストは「玉藻」副主宰の星野高士さん、「泉」副主宰の藤本美和子さん。遠慮のない意見交換をお願い致します。

高士 今日5点句が1つ、4点が1つ。3点がたくさんあります。まず、5点句から。ひさびさの5点句だね。

囀りの初めをあゆむ疎水かな

①青葉

青葉 「囀りの初めをあゆむ」というところで、チツと鳴いたときに疎水の流れも聞きながら歩きはじめたという情景が目についたので、頂きました。

美知子 情景が目につかぶのと、句の流れがきれいで、「かな」で止めているところがとても素敵です。内容も伴っていると思います。

美和子 いかにも俳句だな、という感じがしました。初めの声、と言いなからそのあとの囀りがだんだん高まっていくところも出しているかな。描かれていないところまでも想像させてくれるところがいいところじゃないかなと思いました。